

戦争ドラマスペシャル

石井忠雄作 「はるかなる国」

< 前編 >

(効果音) (洗濯機の回る音)

堀口寿美江 さてと、あと1回洗濯機を回せば終わりだわ。今夜の夕飯何にしようかしら。美子ちゃん、ちょっとテレビつけてくれない？

娘好子 はい。

テレビアナウンサー (フィルター音) 昨日、成田に到着しました中国からの残留孤児の肉親探しが今日から始まりましたが、現在までの2人の日本人からの問い合わせがありました。1人は、東京の三鷹に住む長橋和子さんと、長橋さんは、今回来日した孤児の一人、<sup>スーショウイン</sup>宋淑英さんが、長橋さんの3女、幸子さんではないかと名乗り出て、今日面会をしました。宋さんは、敗戦の年の8月、黒龍江省、興安付近の土手に捨てられていたのを、近くの農夫に拾われましたが、間もなく現在の養父母のもとに引き取られ、<sup>こんにち</sup>今日(以後、会話のバックで)まで育てられていたものです。<sup>きょう</sup>今日の面会で、宋さんは長橋さんの3女、幸子さんである可能性は出たものの、確認にはいたりませんでした。2人は血液検査をした上で、明日、もう一度最終的な確認を…。

寿美江モノローグ 黒龍江省、興安、わたしが菊子を捨てた所だわ。

好子 お母さん。どうしたの？ テレビにクギ付けになっちゃったみたい。

寿美江 …え？ ああ、なんでもないのよ。あの人のお母さん、見つかってよかったわね。さあ、できたから乾かしてっと。

(効果音) (テレビのスイッチを切り、テレビ音声オフ)

寿美江ナレーション わたしの名は堀口寿美江。65歳の主婦です。娘の好子に気づかれぬように、そそくさと立ち上がったものの、その時わたしは、44年前の敗戦の時、中国で、この手で首を絞め、捨ててきた長女の菊子のことを考えていました。今しがた見たテレビで、宋さんのお母さんだと名乗り出た老婦人が、涙を流して宋さんを抱きしめている姿に、あどけない菊子の青ざめた顔がふっとよぎりました。あの子も、生きていればあの宋さんと同じ年ごろなのです。

好子 お母さん、今夜何作るの？ 買い物だったらわたし行ってくるわよ。

寿美江 ありがとう。じゃ頼もうかしら。今夜はカレーにするから、鶏肉とタマネギを買ってきてちょうだい。ジャガイモとニンジンはまだあるから。ああ、お財布はタンスの一番上の引き出しね。

ナレーション わたしは、満州で夫と2人の子供を亡くしました。夫は戦死、長男はソ連軍の戦車の砲撃で即死、長女の菊子は、この手で絞め殺したのです。九死に一生

を得て日本に引き揚げてきたわたしは、縁あって今の主人と再婚し、娘の好子が生まれました。菊子への良心の<sup>かしく</sup>呵責から、神様の救いを求めたわたしは、間もなくクリスチャンになりましたが、菊子の死の真相を家族にはどうしても話せませんでした。

- (効果音) (電話のベル)
- 寿美江 はい、堀口ですが。
- 横川友美 (フィルター音) 寿美江？ 今日テレビ見た？
- 寿美江 何の？
- 友美 (フィルター音) ほら、中国残留孤児の....
- 寿美江 ええ、見たわ。それがどうかしたの？
- ナレーション 電話の声は、わたしの親友の横川友美でした。女学生のころから熱心なクリスチャンだった彼女は、戦争中の軍部の圧力にも、決してイエス様への信仰を捨てませんでした。敗戦の時に菊子のあとを追って死のうとしたわたしを止めた彼女は、その後も何くれとなくわたしを助けて、生死を共にしてくれたのでした。わたしがクリスチャンになったのも彼女の導きでした。
- 友美 (フィルター音) あの宋淑英という人、菊子ちゃんじゃないかしら。鼻の辺りといい、口元といい、若い時のあなたにそっくりよ。年も 45 歳だっていうし、首にアザもあるんだって。
- 寿美江 何言ってるのよ。菊子は死んだのよ。それに、宋さんのお母さんだっていう人、名乗り出ているじゃない。
- 友美 (フィルター音) 実はね、わたし、厚生省の方に電話で聞いてみたのよ。そしたら、宋さんは興安付近の川の土手に捨てられていたのを、近くの農夫に拾われたんだって。その時にね、身に着けていた手ぬぐいがあって、もう薄くて読めないんだけど、名前らしきものが書いてあるんですって。その一つの字は、どうやら「<sup>ことぶき</sup>寿」って字らしいの。そういえば、寿美江の「す」は「寿」という字を書いたわよね？
- 寿美江 何言ってるのよ。人違いよ。「寿」なんて字のつく人はほかにもいるでしょ。それにわたしは、菊子のこと、うちの人には何も言ってないのよ。今更、娘が出てきたからって、何と言って説明すればいいのよ。
- 友美 (フィルター音) ねえ。わたしはあなたと満州を逃げ回り、一緒に引き揚げてきたから、あなたの気持ち分かるわ。でもね、それじゃ菊子ちゃんあまりにもかわいそうよ。今会わなければ、あなた一生後悔するわよ。ねえ、ちょっとだけいいのよ。ちょっと見て、人違いならそれでいいじゃない。石田さんが通訳やってんのよ。うまく話してくれるわよ。ねえ、一緒に行こう。
- ナレーション わたしは、宋さんに母親が見つかったので、よもや菊子だなんてことはあり得ないと思えて、なかなか決心がつかず、その時はとうとう断ってしまったのです。

でも今にして思うと、神様は不思議な方法で、道を備えておられたのです。その翌日、わたしは友美に買い物に誘われました。娘の好子が30になってやっとお見合いする気になったので、その洋服を買ってあげなければと思っていたわたしは、一緒に行くことにしたのです。

(効果音)

(デパートの中)

友美 ずいぶんと込んでるわね。ねえ、まずわたしの買い物に付き合っ  
てね。  
寿美江 ええ、いいわ。で、何を買うのよ。  
友美 スカーフよ。ええと、婦人ものは3階だっけ。  
ナレーション わたしたちがスカーフを選び始めてしばらくたった時、  
友美 ちょっと、向こうから来るの、石田さんよ。じゃ、あの女の人、ひょっとして宋さん  
じゃない？ そうよ、宋さんよ。石田さん！ 石田さん！  
ナレーション 友美からいろいろ伺ってはいたものの、初めてお会いする石田修一さんは、  
中国からの引き揚げ者です。その語学力を買われて、大学で中国語を教えて  
いるのですが、戦争中迷惑をかけた中国の人々に少しでも罪滅ぼしをと、孤  
児たちの来日のたびに通訳を買って出るだけでなく、いろいろと日本滞在中の  
面倒を見ているのだそうです。そして、彼が連れてきたのは、紛れもなくあの  
宋淑英さんでした。  
石田 あ、横川さん。これはこれは。お買い物ですか。わたしたちもそうなんです。あ  
あ、こちらが宋さん。この間、あなた会いたがっていたから、ちょうどよかった。  
宋さん、こちらがこの間お話しした横川友美さんだ。  
友美 石田さん。通訳お願いね。ニーハオ、宋さん、今日はお買い物ですか？ それ  
にしても、お母さんにお会いできてよかったわね。  
石田 ところが宋さんはね、「昨日会った人は人違いだと思う」と言っているんだ。  
友美 どうしてですか？  
石田 あの長橋というご婦人が、宋さんを捨てた場所をいろいろおっしやるんだが、  
皆違うんですよ。あの方ももう70過ぎてるし、血液検査をすることになってい  
るんですが、宋さんは「違う人だと思う」と言ってる。  
友美 宋さんの手ぬぐいをぜひ見たいわ。  
石田 (「うん、うん」と宋さんの中国語を聞いて相づち)「どうしてそんなこと聞くのか」  
と宋さんが尋ねてる。  
友美 わたし、もしかしたら、あなたの本当のお母さん捜してあげられるかもしれない  
の。  
石田 (相づち)手ぬぐいは、今日持ってきてないそうだ。  
友美 じゃあ、首のアザはどうしてできたのかしら？  
宋 <sup>ウォーブチダウ</sup>我不知道。  
石田 (相づち)それね、分からないそうです。養父母も、そのことは教えてくれなかつ

た。あの長橋さんは、縄で作ったブランコに首が引っかかってできたと言っておられたが、宋さんは知らないそうです。

友美 ああ、石田さん。こちらの方を宋さんに紹介してよ。堀口寿美江さん。わたしと同じ満州からの引き揚げ者よ。

石田 堀口さん？ ...堀口さん、失礼ですが、もしかしたらあなた、宋さんのお母さんじゃありませんか？ 何か顔立ちがそっくりですよ。ねえ、宋さん？

ナレーション 宋さんは、驚いたように目を丸くしてわたしを見つめています。わたしには、その時何が起きているのか、頭の中が空っぽになってしまって分かりませんでした。目の前にいる一人の中国人女性。それは、わたしが見ても確かに自分にそっくりなのです。その時でした。

宋淑英 マーマ。ウォーデマーマ！  
媽媽。我的媽媽！

ナレーション 宋さんが、突然わたしの手を取って叫び出したのです。

宋 マーマ、あなたがわたしのお母さんなのですね？

寿美江 (間)いいえ、違います。わたしは違います。わたしの子供は、満州で死にました。もう生きてなんかいないのです。わたしには今、夫と子供がいます。あなたはわたしの子供ではありません。

宋 マーマ、ニーサフォ、ウソです。わたしのお母さんだ。わたしには直感で分かる。

寿美江 いい加減にしてください。人違いです。わたし、失礼します。

宋 マーマ！

友美 寿美江！ 寿美江！

石田 堀口さん！

宋 マーマ。ウォーデマーマわたしのお母さん、ニーショマホイチェマどうして行ってしまうのですか？ マーマ、マーマ...。(泣き崩れる)

ナレーション わたしは宋さんの、いいえ、間違いなくわたしの子、菊子の悲痛な声をあとにしなげら、夢中で外に飛び出していました。

モノローグ (エコー)菊子が、菊子が生きていた！

宋 (エコー)マーマ、あなたがお母さん？

モノローグ (エコー)今更、どうして母だと言える？ 主人や子供に何と云えばいいの？ でも、あなたはわたしの子よ、菊子。生きてくれたのね、菊子、菊子!!

#### <後編>

宋 マーマ、わたしのマーマ、どうして行ってしまうのですか？ マーマ～～!!

ナレーション そう叫ぶ宋さんの声を背に、わたしはデパートを飛び出していました。  
“血は水より濃い”といいますが、宋さんは、間違いなくわたしが敗戦の日の中国で、我が手で殺してしまったと思っていた長女菊子でした。今、わたしはその

子を、本当の我が子を一度ならず二度までも葬り去ろうとしてしまったのです。なんというむごさ。なんという自分中心の醜い心なのでしょう。まんじりともせず夜を明かしたわたしは、どうしてよいか分からず、翌朝友美に電話をしました。

寿美江　　もしもし、ああ友美？ 昨日はごめんなさい。わたし、どうしてよいか分からなくなっちゃって…。

友美　　(フィルター音) 寿美江、いいのよ。分かる。わたしでもああしたかもしれない。きっとあなたのことだから、ゆうべは寝ずに悩んでいたんじゃない？ でもね、必要以上に自分を責めちゃダメよ。そのまんまで、すべてをイエス様に打ち明けるのよ。イエス様は、こんなわたしたちを愛して受け入れてくださっているの。だから勇気を出しなさいよ。

寿美江　　どうすればいいの？

友美　　(フィルター音) 思い切って、宋さんに「わたしがあなたの母です」って名乗るのよ。あとはイエス様にお任せするのね。それに、事情があれば、ほかに分からないように会う方法もあるんですって。

寿美江　　そうね。わたし、自分の子供にあんなひどいことをしておいて、自分だけ幸せになるなんて虫のいい話ね。もう一度宋さんに会ってみる。心の中では確信しているんだけど、わたし、あの手ぬぐいで確認したいの。そのことも聞いてみる。その上で、菊子だって分かったら、公になってもいいわ。わたし、あの子を引き取る。罪の償いをする。わたしの家族だって、きっと分かってくれると思うわ。

ナレーション　　こうしてわたしは、友美と、石田さんにもお願いして、もう一度宋さんに会いに行きました。

寿美江　　宋さん、ニーハオお元気ですか？ この間はごめんなさい。わたし、すっかり取り乱してしまって。

宋　　ナーマいいえ、メーコアンシわたしのほうこそ。

寿美江　　宋さん、今日はわたしの話を聞いてね。わたしの娘の名は菊子っていうの。わたしは黒龍江省に住んでいました。ちょうどあの日、空にずいぶんと飛行機が飛んでいて、近所の人と「何があるんだろう」と話し合っていると、だれかが、「あれはソ連の爆撃機だ。ソ連が宣戦布告をしたんじゃないか」と言っていました。主人は現地徴用で兵隊に取られ、家にはわたしと長男の悟と妹の菊子の3人だけでした。そしてその夜、町のリーダーの方が、「ここは危ない。もうじきソ連軍が入ってくる。至急立ち退くように」と言ってきたのです。わたしはとりあえず荷物をまとめて、車に乗せて家を出ました。

町の男　　さっさと歩くんた。もたもたすると戦車が来るぞ。

ナレーション　　と言う間もなく、道の向こうにソ連の戦車が姿を現し、銃撃を始めたのです。わ

たしたちは、車をコウリャン畑へ引き入れる間もなく、戦車砲弾が近くへ落ちたのです。多くの人が血だらけになり、あちこちで悲鳴やうめき声が上がっています。菊子は、おんぶしていたので無事でしたが、悟は、砲弾の破片が頭に刺さり、気がついたらすでに息絶えておりました。目を大きく見開いたまま、何が起こったのか分からないという顔で、笑っているようにも見えました。さっきまで元気にわたしと話していたのがウソのようでした。わたしは、悟の体を引きずるようにして、コウリャン畑の中に隠すと、息を殺していました。戦車は、声のするほうに砲弾を撃ち込めます。皆、死んだようにじっと動かずにいたのです。やがて戦車は行ってしまい、残された者は、自分の荷物を持って逃げ始めたのですが、その時、思いがけない命令が出ました。

日本人の男

おい、子供を捨てていけ。じゃないとみんなが迷惑するんだ。もし泣かれてもしてみろ、日本人がいることがバレれば、満人や口助に襲われるのが落ちだ。悪いことは言わない。捨てていけ。それに食い物だって多くはないんだ。

ナレーション

軍刀を下げたその男の声に、泣く泣くわたしたちは自分の子を、ある人は中国人に売ったり、ある人はそっと家の前に置き去りにして、捨てたのです。その時でした。

(効果音)

(銃声)

日本人の男

満人の襲撃だ。逃げろ！

ナレーション

わたしたちの荷物をねらって、満州の農民が襲ってきたのです。物は奪われ、手向かうものは殺され、女性は辱められました。わたしは菊子を守るため、荷物を全部捨てました。食べ物もなく、ふらふらになって逃げ回りました。1歳半の菊子は、空腹のため泣き叫びます。それを目標に満人が襲ってきます。体も気持ちもすっかり追い詰められたわたしは、いっそ菊子を殺して自分も死のうと思いました。わたしは、川原で菊子の首をわたしの手ぬぐいで絞め、わたしも川に入りました。しかしその時、横川友美さんに見つかり、引き止められたのです。わたしは菊子のことを話し、死なせてほしいと頼みましたが、友美さんは、命を決して粗末にはしてはいけないこと、すべては神様のご存じなことで、そして極限の状況の中で犯してしまったこの罪も、イエス様の十字架は赦してくださることを一生懸命に話して、わたしを思いとどませたのです。わたしたちはあちこち逃げ回り、ついに菊子の遺体を引き取りに行く機会を失ったまま、帰国してしまったのです。

わたしはそれ以来、菊子のことを片時も忘れたことはありません。もしあなたが菊子なら、わたしは手をついておわびしたいの。宋さん、あなたは手ぬぐいを持っておられますね？それがわたしのものでしたら、あなたはわたしの娘の菊子です。ぜひ見せてください。今のわたしは、信仰をもって成り行きのもすべてをイエス様に任せているのです。あなたには分からないかもしれませんが、



イエス様は最善をしてくださいます。

ナレーション その時、宋さんの顔には、心なしか驚きの色が浮かんだようでした。でも、ややあって彼女はこう言ったのです。

宋 あの手ぬぐいは、今、ここにはありません。それに、あなたは、わたしの母ではありません。

寿美江 え？ なぜです？ 昨日はあなた…。

宋 今のお話を聞いていて、そう思ったのです。でもつらいお話をよくしてくださいました。今日は本当にありがとうございます。さようなら。

ナレーション そう言うと、宋さんはわたしを押しつけるようにして、立ち去ってしまったのです。“子を捨てた親が、今度は子供に捨てられた”、そんな思いでわたしの胸は張り裂けそうでした。

(音楽) (悲しみ)

ナレーション いよいよ最後の日がやってきました。中国残留孤児は、宿舎をたち、成田から帰国の途に就くのです。あきらめ切れないわたしたちは、空港に見送りに出かけました。今回は、肉親に巡り合えた方が少なく、一人一人の顔は沈んで見えました。めいめい、思い思いの土産物を持って、別れを惜しんで通路を進んで生きました。

友美 あ、宋さんよ。

ナレーション こちらに会釈する彼女の、泣くのをこらえたような笑顔を見た時、わたしは思わず彼女のそばに走り寄りました。

寿美江 宋さん！

そう シェーシェー、堀口さん、いろいろとありがとうございました。あなたのことは決して忘れません。これをどうぞ受け取ってください。

ナレーション そうやってわたしの手をしっかり握ると、彼女は小さな包みを差し出しました。わたしをじっと見つめる彼女の目には、涙がにじんでいました。

(効果音) (飛行機の離陸音)

ナレーション わたしは放心したように、空港のベンチに座ると、その小さな包みを開けました。中から出てきたのは、あの手ぬぐいと、一通の手紙でした。

寿美江 石田さん、お願いします。

石田 はいはい。えーと、親愛的<sup>シンアイデマーマ</sup>媽媽、愛するお母様へ。長い間、夢にまで見たお母さんにお会いできて、心からうれしく思います。(菊子の声に)

菊子 菊子は、自分がどのようにして中国に残されたかを知ることができました。養父母の話によると、わたしは橋の上で拾われたのですが、息を吹き返したわたしは、そこまで<sup>は</sup>遠<sup>は</sup>っていったのかもしれませんが。わたしを拾ってくれた農夫の方は、わたしを金持ちに売ったのだそうです。そこでわたしは、朝早くから夜遅くまで牛馬のように働かされました。ふるにも入れてもらえず、食べるものもな

く、休むと厳しい体罰が待っていました。しかし、近くに住む学校の教師が、かわいそうに思い、わたしを引き取って育てることになったのです。それが今の養父母です。父母はわたしを引き取るために多額の金を払ったようです。わたしを学校に上げてくれました。当時、学校で日本人だと分かると皆からひどい目に遭いました。その時、父母は「淑栄は中国人だ」と言ってかばってくれました。食べ物も、自分たちは半分にしても、わたしには十分に食べさせてくれました。

今、養父母は年老いています。彼らの恩を忘れて、わたしは日本人になることはできません。どうぞ分かってください。でもわたしは最後に、お母さんにきっと喜んでいただけることをお話します。わたしは養父母から何にも替えられないものをもらいました。お母さんと同じ、イエス・キリストを救い主と信じる信仰です。あの時、お母さんがクリスチャンだと聞いて、わたしは胸が熱くなり、思わず「マーマ」と叫びそうになりました。お母さん、わたしとあなたは国境や民族を超えて、主に在って一つなのです。ですから、この地上では一緒に暮らせなくても、悲しまないでください。わたしは、お母さんと天国に行ってもう一度会うことができるのですから。

人間が引き起こした戦争で、多くの命が奪われ、生き残った者も、それぞれが心と体に傷を負いました。あなたがわたしを置き去りにしたことを知った時、わたしはあなたを憎みました。でも養父母が、あなたを決して恨んではいけないと、何度も言いながら教えてくれたイエス様の愛を知った時、わたしは、お母さんもまたどんなに苦しんだらうということを理解することができました。ですから、わたしのことで、もう心を痛めないでください。わたしはあなたを、主にあって赦しています。ではお母さん、お元気で。ご機嫌よう。 宋 淑英

寿美江モノローグ 菊子...

ナレーション わたしは、宋さんを乗せた飛行機の飛び去った、真っ青な空をいつまでも見上げていました。あの空が、宋さんと、彼女をキリストに在る大きな愛ではぐくみ育ててくれた養父母の住む、はるかなる国に続いていることを信じながら...

< 完 >